

悲しみに堪へて向へばこの友はくちびる薄し
 饒舌りてやめず

富士の嶺にゆふ居る雲のながき雲ころはい
 まはしづもりにけり

かはたれの驛に灯をつけ止まり居るこの夕汽
 車は何處に行くらむ

棺 車

ふる里におくる柩をまもりつつ峽のなが路に
 日はくれにけり

秋ふかき峽間のなかのゆふ河原待宵の花はし
 ぼみ咲きたり

夜に入れば車のうへの風さむみ悲しなみだは
ひとり湧きくも

峡ふかく日は暮れたれど田にはまだ人居て打
てる鍬影あはれ

道ばたの小戸より人は怪かりてこの棺ぐるま
見送りにけり

先立てる母の車中にすすり泣き闇のなかより
おりおり聞こゆ

こころ我れにかへればかなし暗がりの耳のち
かくに水鳴るきこゆ

朝浪のかすむ渚をほのぼのと亡き子に似たる
をとめ來たるも (鎌倉にて四首)

朝がすみ亡き子を思へばあはれなる玉の如くに思ほゆるかも

雨開けの海のひかりに見入りつつ眼まなこのそこに痛みをおぼゆ

銀いろに邊へによる浪よあたらしくまた悲しみの湧かんとするや
(三月作)

含み言一

含まごもる少女をとめごころを餘よ事言ことにはとほと云ひぬ憎にくからめやも

白粉おしろいのなみだに似になす霰雪みぞれゆきにはひやかには降ると云はずやも

おしろいの溶き水ほどの斑ら雪はだらに降れば
 ば怨みつらんか

ちらちらと雪ふる影に見ぬふりの丹づらふ妹
 が忘れ兼ねつもの

慎ましく瞳をおとす襟もとに街のみ雪は降り
 初めにけり

打ちどよむ遠きみやこの灯のなかに歸りてを
 居り戀ふるに堪へず

冬さればい續ぎいつぎに曇る日のくらく命の
 戀ひも死なんよ

戀ひつつも例へば春のかぎろひの幻影ならば
 悲しかるらむ

君が家の早萩のはな散り過ぎてすでにひさし
と嘆きたらずや

おほやけに言にいほねど蓋しくもなげける言
のむなしかるべき

ひんがしの空に開くる朝びかり必ずはあはめ
その豫言に (二月作)

二

我妹子に戀ひば愛しき紅つばき未だはつはつ
ふふめれり見ゆ

紅つばき唇をあくれば愛しきを人に任すが嫉
くてならぬ

ちらちらと廻り燈籠の赤きいろ敏きにすぎて
 女嫉しも

焦るれば執着ふかし蛇の眼の赤き傷みも我れ
 は覺えし

小夜くだち獨りいらちぬ我妹子が如何なれば
 かも言絶えたらむ

ぬば玉の夜のあらしの浪の穂にひかる蟲かよ
 戀ひ現はれて

悲しみの海べの泊り夜もすがらあな息衝かし
 もよ浪のおと去らず

今の間は息もくるしき浪のおとこの苦しさを
 告げやらましを

ほかにまた或はをとこ近づきて向日葵の花め
ぐりつらんか

わぎも子を人には告らじ光る蟲浪穂のそこに
ぢつと沈まね

流れ藻にふるるは悲ししかれども流れて行か
は長く嘆かむ (四月作)

桃 畑 (旋頭歌二首)

淡海路の山のはたけに桃摘むをとめ、乙女ら
が赤きたすきを眼に戀ひにけり

足びきの山畑かぜの吹けや清さや、をとめら
が桃の葉かげによく見ゆるらむ

中宿

山ふかき郷里にかへりつ中宿の町にひと夜を
ねむるかなしさ

中宿の町にたまたま出てきたる父と相見れば
白髪ふえけり

大正二年 (附同年前作)

ゆ
ふ
べ

暑き日の日暮れとなればうら悲し倉かげに行
きて物を思ふも

倉の戸に書きのこる^{まじ}的の墨^{すみ}のいろうすうす昔
思はゆるかも

若^{わか}やげる我が夏^{なつ}影^{かげ}も年^{とし}ごと^とに衰^{おとろ}へ行^いけば今日^{けふ}
もかなしも

このゆふべ盃^は蘭^{らん}盆^{ぼん}燈^{とう}籠^{ろう}のいくつかを張^はりかへ
て何か夢^{ゆめ}なかりけり

若^{わか}き身^みの青^{あお}山^{やま}里^{さと}に歸^{かへ}り來^きて家^{いへ}繼^つぐべくは悲^{かな}し
かりけれ

ゆふ庭^{にわ}の木^き蔭^{かげ}を見れば雛^{ひな}の鶏^{とり}言^{こと}葉^はをやめて静^{しず}
かなるかも

曇^{くも}り日^ひの軒^{のき}したくれて姪^{ひら}み犬^{いぬ}砌^{せき}のうへに眠^ねり
居^いるかも

腹^{はら}這^はひし犬^{いぬ}眼^めをとぢて人^{ひと}のごとし身^みにこもる
音^{おと}に聞^きき入^いるらしも

人間のいのち悲しと知りそめて幾年ならん尙
生き居るも (八月作)

ゆふ月夜街のはづれの墓に来ておぼろに人の
戀ほしくなれり

墓つづき田は刈られ居てゆふ靄やひんがしの
山に星一つ居り (十月作)

眼ざらふ夏野のなかの遠きみづ巨椋の池は霞
みたり見ゆ

みなづきの河原あらはに山のかげ橋架くる兵
の白き幾むれ

架橋兵石の俵を詰めるおと宇治の河原にきけ
ば寂しも (六月作)

墓地の灯

夕されば畑のつかさの草のなか我家の墓地に
灯の並びけり

弟妹等をつれて來れば愛しみ墓の立木に茅蝸
啼くも

ほのぼのと生命の意識目ざめたるゆふ桑道の
青の漂ひ

我がへより風立ちわたり粟畑にゆふ光こそ流
れたりけれ

粟の葉に風吹きわたりさらさらと胸のべにし
てやさしく鳴るも

ゆふぐれて玉蜀黍畑の葉のかげに来て佇めば
心は湧くも

愛しくも握りしめたる玉蜀黍の幹のふくらみに
稚き實こもり

玉蜀黍の葉腋にのびし紅き毛のはぢらひ勝ち
に思ひたりけり (八月作)

榛紅葉

みちみちの山の樹の間の榛紅葉はやわが心も
え居たるかも

妹が目のふかき情もたまなれば鮮かにみて往
なんと思へや

わが戀は池の鯉魚ひらの浮きしづみつぶさに見ね
ば惱みたりけれ

けだしくも母がそばより俯伏うつぶに眼まを深うして
見たる妹いなれば

その母を愛かしく思へば然るゆゑにその子に戀
ひて憤うみたりしか

かはたれを我れに來向きむかふわが乙女をとめやや赤面あかみ
ゐて憎にくからなくに

ゆふ庭に榎えん櫃びのにはひ熟うれゐたり君によりつ
つ然しか思ひたり

灯ひのなかの眼近まぢかの君がつつましさはししみじ
み我れ飯食いひむも (十二月作)

鳳仙花一

山峽やまがひのこのふる里さとをまだ出でずはや秋らしき
雨を今日見れ

大さ家にひとり留守留守るる晝の雨ぬれゆく庭に
鳳仙花あはれ

言こと絶えてやや久なれや遠とほびとはこの降る雨に
如何いかせるらむ

末かけて日ながくのみに言こと出でず戀こひひつつあ
らば何時いつあらめやも

流れあめ軒のきにながれて降りやまず徒いたづらにわれを
物思はしめつつ

しらじらと雨ふるなかの丹の花のありがてな
くに寄りにけらしも

二

鳳仙花土にくはしく散りゐたり下ごもりたる
葉の蔭の廻りに

鳳仙花葉立ちみだれて赤き花わが戀ひごころ
みだれたりけり

爪ぐれの雨にまかせてかく散りて蓋しやかれ
が忘れたるらむ

わかれ居てはわが安からぬ心かな爪ぐれの赤
き土をば踏みて

慎みつつ戀ふればあたら爪ぐれの餘所見の間
だに散らずと云はんや

我がをとめ慧き仔鹿の瞳をもてり年ごろ戀ひ
て知らざらめやも

くちびるに似てを向きたる紅きはな愛しかり
けり青き葉かげに

莖のびし鳳仙花みればさ丹づらふ我妹に見え
て莖の愛しも

葉がくり花の柄ながき爪ぐれは人の粧姿に
似てを愛しも

はつはつに未だ觸れねど爪紅のゑまひを見す
る人のかなしさ

爪ぐれは乙女のごとく首垂れて露ひかる眼を
しのばしめたり

葉の車花にこぼれて光るだも座ろに堪へず君
が眼を欲り

何なれば雨に真紅に洗はれて美しきのみにわ
が見ざるかなや

鳳仙花あまりに赤く地に見えてちりぢり散る
は我が疾みなり

戀しけば吾がまぢがたし爪ぐれの雨に堪へつ
つ秋待ちがし

鳳仙花ほろほろと散るかくのごとたやすく散
りて身をまかすかや (八月九月作)

赤き宮

松馬場をゆけば向うに赤き宮われの眼に愛し
みわくも

松の間に愁さりけり赤き宮たかく光りて見え
そめぬれば

廣庭を宮居へまゐる静ごころ白きひかりは降
りゐたるかも

赤あかと岡べの宮を見れば天よりひか
り静かに降るも

下駄はける老案内者ゐて境内をわれに近づ
日のひかりかも

ひつそりと丹塗りの宮のなか庭に時節の蜜柑
の熟れて明しも

松高き馬場の巷の料理店おぼろ月夜に灯を閉
ざしけり

長谷寺の厨裡のゆふべに物問へば發育のよき
乙女が居たり (十二月作)

金 葉

夕づく日眼に傷みあれ樹によれば公孫樹落葉
の金降りやます

燃えあがる公孫樹落葉の金色におそれて足を
踏み入れにけり (十二月作)

鴨 四十二年作

このゆふべ背戸の刈り田の霧ぬちに鴨聞きながら
雨戸を繰るも

霧ながら月の照りたる刈り田にはいづらやは
そく鴨の啼くらむ

よく見ればすぐの刈り田の月影のゆらげる水
に歩み居る鴨

立ち聞きして暫く待ちて戸を閉ぢぬ乏しくはあ
れど鴨のなく聲

ゆふづく日土庭の隅の塵塚にがらすの碎片の
光りやまらずも

窓押せば鳴きゐたる墓^{かま}なきやみぬ灯^ひにかがや
きてしとど雨降る

いにしへの是れの狩^か場の枯^か尾^を花^{はな}きたり遊びて
ひと日暮せり

もののふの古きかり場のかれ尾花今は長くて
胸をし埋む

胸をうづむ尾花が末^{うれ}は山すそへ光りなびきて
暮れつづきけり

ゆふぐれて山をくだれば蟲のこゑ道もせにし
て頻りに鳴くも

橋^{たし}花^{ばな}のかほりの深きおぼろ夜にひとりなやみ
て物をこそ思へ

遠空へひとりぼつちに沈む日のあかきを見れば
 涙ぐましも

そとに出て月に立てれば夏のくも明るき空を
 ちかく飛べるも

白雲の山端をいづる月の夜のあかるみにこそ
 鴉啼きたれ
 (大正二年八月改作)

椿

四十一年作

さやさやし庭檜が枝の朝の風ここだ露けく椿
 散りぬる

落つばき珠に貫きつつ寺庭にあそべるとき
 の
 妹ら思ほゆ

みち道の椿の花を摘みなづみ蜜を吸ひつつわ
 が行く山路

しみじみと日の降る屋根に人ひとり紺に匂ひ
 て粉茸さゝるるも

春の日の門に枝垂りし孟宗竹はしづ揺れつつ
 も永く暮れずも

今朝見れば刈り揃ひたる女竹垣にすがすがし
 もよ斑れ雪ふり

梅の花うす黄がふふむ淡雪は手につむからに
 匂ひて消つつ

浴室の窓よりみれば湯気のうち紅梅のはなに
 散らす雪かも

山くぼの畑はたけのなかの茅家あはらやをかくむ白梅日は暮
れんとす

茶垣ちがきより二本ふたもと立ちし枇杷びわの枝えだは厠かほやの軒のきに片枝かたえだ
咲きけり

向山むかやまの青葉あおばしげ山やまみて居ればかすかに木この葉
動うごきて居るも (大正二年改作)

柑橘かんきつの庭 四十二年

柑橘かんきつのあかるく熟うれし奥庭おくにわは雨あめながらひる戸
を鎖かぎしたり

庭にわの樹きに雨あめ繁し吹きつつポンタンが折おをり光ひかりる
その葉はの中に

にはたづみ流れてくれればポントンは擦りがて
に揺る風にもまれて

ポントンの枝ひくければ黄金だまあらしの雨
に泥はねにけり

手水鉢に雨水満てばおのづからポントンの實
が浸りたりけり

あをあをし椿の垣にポントンの實は埋れつつ
大きく明し

雨のあと散り葉の青が砂庭にここだく悲しみ
な泥ぢながら

麻の香 四十二年

月照らす麻野をひくく飛ぶ鳥のかげの消え
く野末かそけさ

おばしまに月の麻原見て立てば原の裾はろに
低き山かすむ

月清し廣麻畑のふかみより人語り行くこゑぞ
きこゆる

かぜ吹けば三次麻野の千葉ゆらぎ葉うらが白
く立つ浪のごとし

麻が香をゆたかに含める朝霧を胸うち開けて
飽かず吸ふかも

霧ふかく濡れたる麻の畑はたけよりいささ朝かぜか
ほり高しも

林 泉 集 終

卷 末 小 記

○本集に收むる歌數五白六十一首は、概ね「馬鈴薯の花」(大正二年六月刊行)以後の作である。内未だ一度も世に發表しなかつたのが約百首ある。「馬柵の霧」「梅雨渚」「霧の海」「棺車」「四日月光」等がその主なるものである。古い手帳から探し出して多くは、本集を編む際に改作した。其他に未だ明治四十一二年頃の作約三四十首(卷末の「鴨」以下四篇)をも收めてあるが、之は元來「馬鈴薯の花」に採録すべき筈の歌である。同集に編み漏した故改作して後に諸誌に發表した。今改めて之を本集に入れるのは、聊か氣後れしないでもないが、併し自分の現今の作と最初期の作とを對照し得る便利もあ

るので、矢張り棄てないことにした。

○初めの心算では、本集の巻末に於て予の短歌の系統由来について聊か記しておきたいと思つて居たが、急に歸國の用を生じてその隙もなくなつて了つた。唯だ若し予の歌に見るべき所があるとすれば夫れは故人で伊藤左千夫、長塚節、堀内卓造の諸氏、同人で、島木赤彦、齋藤茂吉、古泉千樫の諸氏竝に平福百穂氏等の志厚い鞭鞭の結果が現れて居るのであらう。前記故人の三氏にこの集を讀んで頂けないのは返すがへすも遺憾である。

○次に本書出版については、直接間接に、前記同人四氏、ほか山田邦子、高木今衛、木曾馬吉の同人諸氏の厚志を得た事と光風館四海民藏氏、森園天涙氏、友人天野彦三氏の異常なる

同情と盡力とを受けた事を特に記して感謝せねばならぬ。平福百穂氏に至つては忙しい中を本集の挿繪装幀のために特に骨折つて頂き恐縮と感謝とに堪へぬ。内「湖の女」は同氏の本年の文部省展覧會出品「田澤湖傳説」の下繪を頂いたもので此の上もなき記念となつて誠に歡ばしい。今この機を以て諸氏に深く御禮を申上げる。

○終りに、本集の再校正以下製本に至るまで、全部自分が携つて居る事の出来ないのは残念である。残務を處理して頂く四海、森園兩氏、アララギ同人諸氏には重ね々、恐れ入る次第である。

○郷國では予の幼時から愛撫を受けた外祖母が危篤に瀕して居る。予も勿々校正の朱筆をおいて歸らねばならぬ。

い。折からこの半月に亘る不順の寒雨に迷つて寓居庭前の山茶花はつぎ／＼に花を開きはじめて居る。この惜しい時を今から予は出發歸國せねばならない。大正五年十月十二日正午、牛込横寺町の寓居にて著者記す。

大正五年十一月二日印刷
大正五年十一月五日發行

定價金九十錢
郵税金八錢

歌集
林泉集
奥附

著者 中村憲吉
東京市牛込區横寺町六十四番地

發行者 久保田俊彦
東京市小石川區上富坂町二十三番地

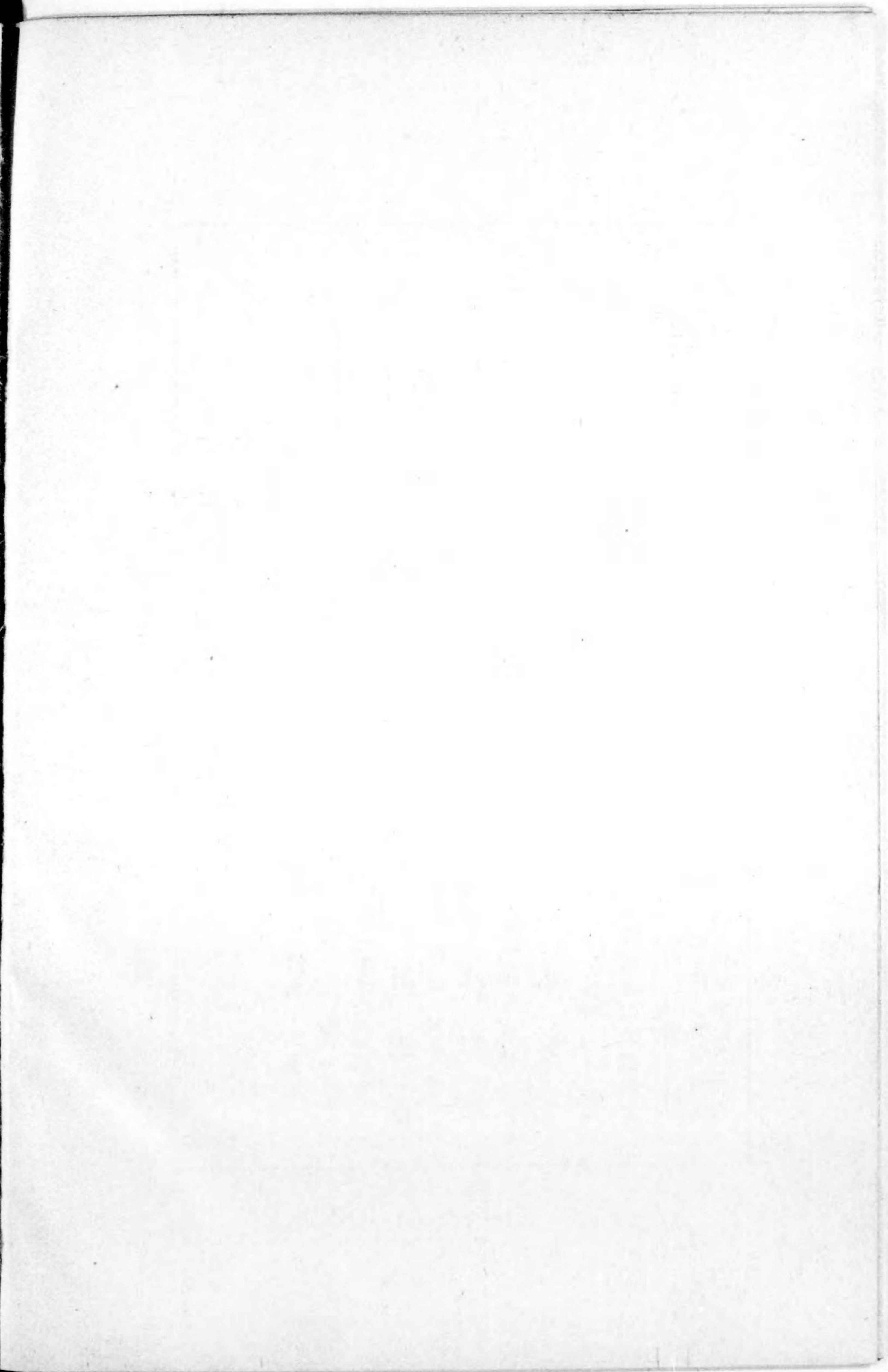
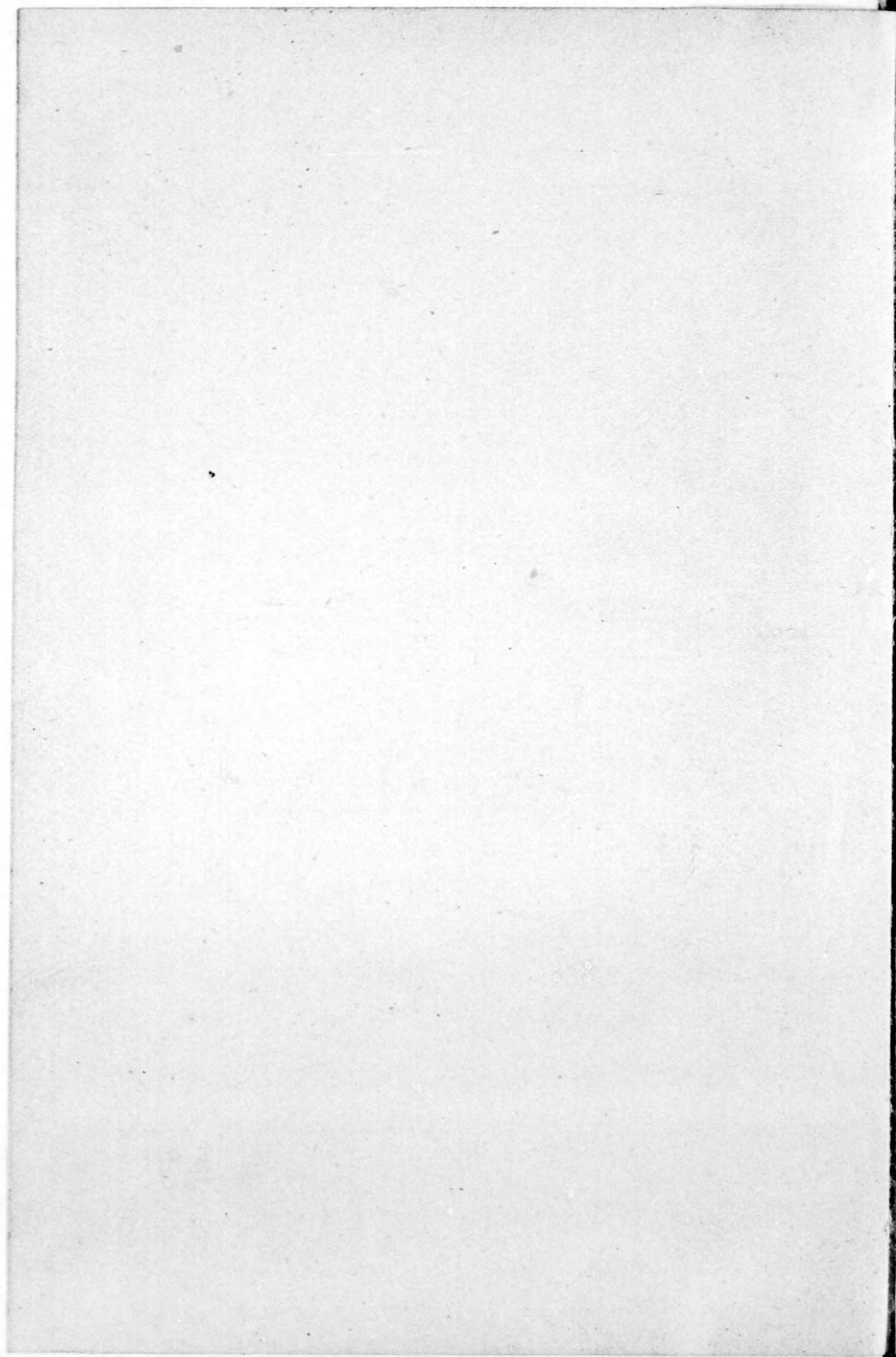
印刷者 渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

製本者 小川由次郎
東京市神田區表神保町七番地

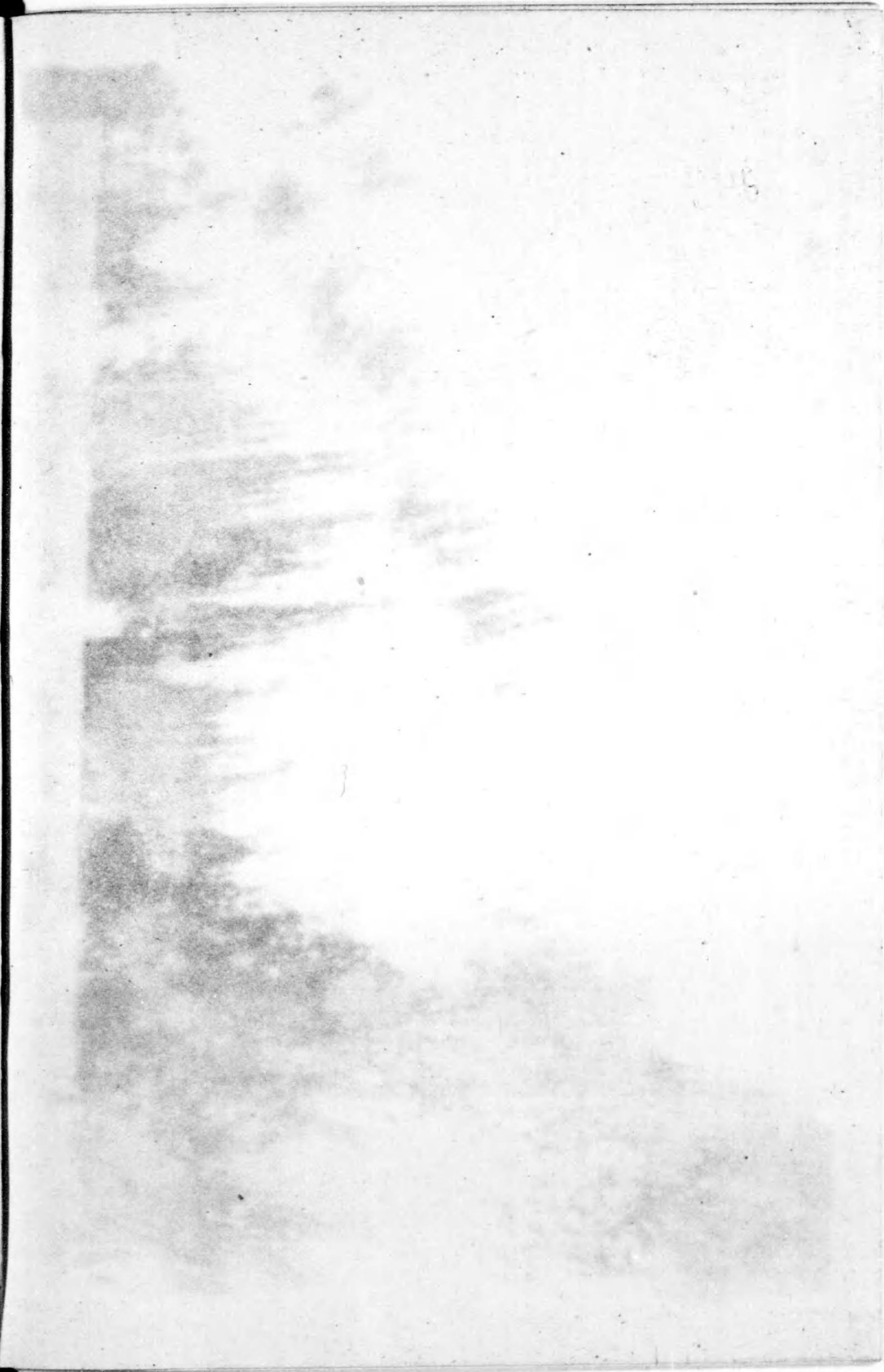
發行所 アララギ發行所
東京市小石川區上富坂町二十三番地
振替口座東京二八三四三

發賣所 光風館書店
東京市神田區裏神保町六番地
振替口座東京三〇三九

電話本局二〇三九
振替口座東京三二七



252
241



終

